

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（教育学）	氏名	伊藤 賀与子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 中国人上級日本語学習者の講義聴解に及ぼす聴解前教示の効果 －説明予期・説明産出教示を操作した実験的検討－			
論文審査担当者			
主査	教授	松見	法男
審査委員	教授	中條	和光
審査委員	教授	柳澤	浩哉
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国語を母語とする上級の日本語学習者が日本語での講義を聴く際に、後で内容を他者に説明する意識を持つ場合、講義内容の理解が促進されるかどうかを検討したものである。実験では、他者への説明を意識させるために、聴解前の教示として、説明予期と説明産出の2種類を操作した。加えて、一般的な聴解テストで測定できる日本語の聴解力（以下、テスト聴解力）の高低を設定し、説明言語（母語か第二言語か）の違いも操作した。本研究では、理論的枠組みとして、van Dijk & Kintsch (1983) 及び Kintsch (1994) による文章理解の表象の3水準を取り入れた。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、まず第二言語の聴解に関する先行研究を、聴解の過程、聴解時の情報処理、講義の聴解の各側面から概観した。次に、文章理解における説明予期・説明産出の効果に関する先行研究を概観した。van Dijk & Kintsch (1983) 及び Kintsch (1994) が提唱した文章理解モデルで想定される表象の3水準に基づいて文章の表象形成の過程を論じ、先行研究の問題点を指摘した。そして、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章では、研究課題に沿って実施した4つの実験について述べた。</p> <p>実験1と実験2では、第二言語である日本語での講義聴解において、学習者が第二言語である日本語で説明する意識を持つことが、講義内容についての理解表象の形成と理解度にかかわる自己評定に与える効果を検討した。実験1では、「説明を意識させつつも実際には説明を産出させない」説明予期教示を採用し、通常の講義の聴き方に類似した内容理解を目的とする教示（以下、内容理解教示）と比較した。実験2では、「説明を意識させ、かつ聴解後に説明を産出させる」説明産出教示を採用し、同じく内容理解教示と比較した。2つの実験の結果、日本語 N1 取得者である上級学習者でも、テスト聴解力には差があり、聴解目的とのかかわりにおいて、理解表象の形成と理解度の自己評定が異なることが明らかとなった。命題テキストベースレベルでは、テスト聴解力の低い学習者は第二言語による説明を予期することにより、意味処理が促進されることが示された。他方、状況モデルレベルでは、テスト聴解力が高い学習者の方が低い学習者よりも成績が高くなるものの、テスト聴解力の高低にかかわらず、説明予期教示、説明産出教示の方が内容理解教示より</p>			

も表象形成が促進されることが示された。説明を予期する教示により、テスト聴解力が低い学習者でも、「説明観」に基づいて設定された目標に沿って、聴解中に理解表象の形成を志向した処理が多くなされ、自身の理解状態も積極的に評価されることがわかった。

実験 3 と実験 4 では、第二言語である日本語での講義聴解において、学習者が母語である中国語で説明する意識を持つことが、講義内容についての理解表象の形成と理解度にかかわる自己評価に与える効果を検討した。実験 3 では説明予期教示を採用し、実験 4 では説明産出教示を採用して、それぞれ内容理解教示と比較した。2 つの実験の結果、学習者が母語による説明を予期した場合は、命題テキストベースレベルにおいて、通常の内容理解に近似する注意配分がなされることが推察された。他方、状況モデルレベルでは、テスト聴解力の低い学習者において、母語での説明を予期するだけでは表象形成が促進されず、実際に母語で説明を産出することにより、テスト聴解力が高い学習者と同程度の効果がみられることがわかった。実験 1 と実験 2 の結果を踏まえるならば、テスト聴解力が低い学習者は、説明言語が第二言語か母語かにかかわらず、説明予期によって厳しい基準で自身の理解を問い直す評価機能が強く働くといえる。

第 3 章では、実験 1 から実験 4 までのまとめを行い、上級の日本語学習者が日本語での講義を聴く際の理解表象の形成に関して、内容理解教示におけるテスト聴解力の高低による差異を踏まえた上で、第二言語並びに母語による説明予期・説明産出のモニター過程を考慮しつつ総合考察を行った。併せて、命題テキストベースと状況モデルのレベルを中心に、深谷（2011, 2014）の知見を発展させた認知過程モデルを提案した。そして、本研究の意義、日本語教育への示唆、今後の課題を順に述べた。

本論文は、以下の 3 点で高く評価できる。

1. 第二言語として日本語を学ぶ上級の学習者を対象とし、日本語の講義聴解における説明予期と説明産出の教示効果を実証的に解明した点である。従来、説明予期・説明産出教示の効果については、母語話者の読解を扱う研究が多かった。本研究は、母語の読解指導法の一つとして位置づけられる説明予期・説明産出の教示が、第二言語の聴解においても有効であることを示した。
2. 実験における独立要因として、日本語学習者のテスト聴解力の高低を設定し、説明言語の種類を操作した点である。本研究では、説明予期・説明産出教示による促進効果の現れ方が、テスト聴解力の高低や説明言語の種類によって異なることがわかった。上級の学習者でも、これら 2 つの要因が講義聴解に影響を与えることを明らかにした。
3. 中国語を母語とする上級日本語学習者の講義聴解における説明予期・説明産出教示の効果について、学習者自身の理解度にかかわる自己評価結果と深谷（2011, 2014）の知見に基づき、新たに認知過程モデルを提案し、説明した点である。本モデルは、第二言語の講義聴解研究の発展に寄与するものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 4 年 9 月 29 日